

この賞も四回目となると応募者の方々の小説および文章に対する感覚も鋭くなってきて、最終選考に残った八作品ともそれぞれが興味深い島文学（宮古島とは限らない）の小説の舞台を作り上げていました。

視点が作者によって四方八方異なってきたのは、読む側としてもどんな物語の展開になるのかということに引き付けられて、小説を読む楽しみを受け取りました。したがって優劣をつけていくのがなかなか大変な作業で、相当迷った末に、私は最終的に四編の作品を集中的に推しました。

少ない枚数なので個々の作品のコメントは短くなりますが、それでもひとつずつ感想を述べて行くと、まず「神歌由来」です。これはいつの時代、どこの島とも知れぬ神話ともとれる世界で、かなり激しいドラマ性をもってひとつの大きな小説世界を築き上げました。

「家出は舟で」は十四歳の中学生が舟で漂流し島にたどり着き、岩壁に登って降りられなくなるという不思議な話の設定で、なかなかスリリングな展開と謎をたくさん含んで終章に入っていきます。

「島の音」は、フルートの練習を浜辺とする青年と、それに刺激されてバイオリンを演奏する青年、それに大きなカメがからんでくるという、単純だけれど先々を期待しながら読んでいくスリリングでさわやかな作品でした。

「レモン色の月」はタイトルが少々乙女チックなので、これはこれは、という思いで読みだしていきました。島に住んでいた主人公が帰郷してからの母などとの時を隔てた付き合いに話の焦点が当てられています。非常に読みやすい文体と、かなり書きなれたと感じる話の運び方がなかなか巧みで、優しい気持ちになりながら一気に読み進んでしまいました。

以上の四編が最初に読んだ時の私がとりわけ引き込まれた作品です。選考会ではここに「猫投祭」がかなりの高得点で、島に伝わる何とも不思議な海に向かって猫を本当に投げるといふ祭りに集中して話の焦点を当てています。祭りの由来についての記述からその一番新しい祭りに外国人の奇異な視点が入り込み、話を奥深いものになっています。

「朝光の畑」は島に住む小学六年生の少年たちがもう一つ別にある小学校の生徒たちと交換会をするための資金集めをするといふ話の展開を背景に、島に伝わる不思議な人と人との縁を折り目にし畑に野菜を植えるといふ資金集めの経緯が語られ、その成長と人の輪がまさに朝日に輝くようなさわやかな情景を紡ぎだしています。

「不死王の島」これまで語ってきた作品とはだいぶ異なった神話のような小説で、読むものに小説の持つ力を示してくれますが、結局何が語られたのかしばし考え込んでしまいました。

「嘆きの森」は内海に浮かぶ一つの島で四十年前にあった話、と梗概に書かれているから本当に起きたことに取材しているのかと思いつつ読みました。森の奥から正体不明の音が聞こえてくるという謎めいた話が展開されるのですが、作者の語りたかったところを今一つの確につかむ能力が私にはなかったようです。

以上の感想から、最初、私は「レモン色の月」を推す気持ちが強くありましたが、最終的に「猫投祭」が一席との結果になりました。それぞれの作品に対して選考委員によってどの部分を評価しているのか、あるいは問題としているのか、異なりますので、各賞決定までの論議が深くかわされました。全体にこの評価で今回も大きな波乱はなかったように思います。